

# 『源氏物語』の要判定疑問表現

——「ニヤ。」形式を中心に——

磯 部 佳 宏

## 一 はじめに

中古の要判定疑問表現としては、

——ヤ——。

のように、文中に係助詞「ヤ」を用いる形式が一般的である。

これに対して、要説明疑問表現の場合、

疑問詞（……）カ——。

のように、文中に係助詞「カ」を用いる形式が一般的であるが、『源氏物語』を調査したところ、この形式の全346例中、約半数の167例の場合、係助詞「カ」が断定の助助詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接した形となっており、特に、次のように「ニカ」以下が省略された形が109例と目立っている。

(1) 春宮のおほちおとどなど、いかなる事にかと思し疑ひてなんありける。 (桐壺)

(2) (薰)「……。(あなたハ)いかなる御なやみにか」と(匂宮ニ)聞こえ給ふ。 (浮舟)

つまり、実際には、

『源氏物語』の要判定疑問表現 ——「ニヤ。」形式を中心に——

疑問詞——ニカ。  
の形で多用されているわけである。

そして、この形式については、築島裕氏が、

和文では、(中略)「か」「や」(引用者注「ニカ」「ニヤ」の形のこと)で文又は節を終止して、あとの「あらむ」などを省略したやうな形が多いが、これは訓点には殆ど見出されないやうである。

と指摘されているように、中古においても、漢文訓読の世界では稀のようであるし、さらに、中世の覚一本『平家物語』においては、「ニカ」以下の省略されていない場合も含めて、用例が全くみられないことから考えて、この「疑問詞——ニカ。」の形式は、中古和文において好んで多用される、特徴的表現なのではないかと思われる。

そこで、この稿では、要説明疑問表現の場合の「疑問詞——ニカ。」形式に対応する、

——ニヤ。

の形式を中心として、『源氏物語』の要判定疑問表現について調べ

てみたいと思う。

なお、要説明疑問表現の「疑問詞——ニカ。」の形式は、実質的には「ニカ」で文が終止していることから、むしろ、

(3) (中将) 〈あさましう、こはいかなる事ぞ〉と思ひ惑はるれど、  
(帚木)

(4) (中の君) 「いかなる御心地ぞ」と、(浮舟二) たちかへりとぶらひ聞こえ給へば、  
(東屋)

のような、「源氏物語」には180例存在している、文末用法の「ゾ」を用いる、

疑問詞——ゾ。

の形式と、直接比較対照できる存在なのではないかと考えられた。

そこで、要判定疑問表現の「——ニヤ。」形式についても、

——ヤ。

——カ。

のように、文末用法の「ヤ」や「カ」を用いる形式との比較対照もしてみたい。(用例検索には「源氏物語用語索引」を利用し、本文引用の際には「対校源氏物語新釈」によるが、私意により表記は改めた箇所がある。また、心中思惟の部分には( )を付した。)

## 二 「——ニヤ。」の形式

疑問の係助詞「ヤ」は、文中用法として全例(和歌および詩句等の引用に基く用例は除外した)使用されているが、約40%にあたる41例は、「ヤ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接した形となっており、要説明疑問表現における「疑問詞——ニカ——」。

「疑問詞——ニカ。」の場合ほどではないが、かなりの高率を示している。そのうち、

——ニヤ——。

のように、「ニヤ」以下の省略されていない形が138例、そして、

——ニヤ——。以下に省略された形が303例で、係助詞以下の省略された形式が特に目立つ点も、要説明疑問表現の場合と同様である。

表1は、「——ニヤ——。」「——ニヤ。」

両形式の使用場面(地の文・心中思惟・会話文)

について示したものである。(なお、手紙文での用例は会話文の中に含める)

「——ニヤ——。」形式の場合、大部分が

文末に推量の助動詞「ム」「ケム」「ラム」を含んでおり、

(5) (源氏) 〈……近きよすがにて見むは、飽かぬ事にやあらむ〉と見給へど、  
(蛩)

(6) (源氏) 〈さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける、昔の世の行ひ人にやありけむ〉など思しめぐらすに、  
(若菜下)

のように、心中思惟において、言語主体の「疑い」の表現として使用されている例や、

(7) 鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらむ、ただ翁びたる声にぬかづくぞ聞こゆる。  
(夕顔)

(8) まいて、心かけ給はむ男は、〈……〉と思ひて、さるべき折にや

表1

	——ニヤ——。	——ニヤ。
地の文	46	113
心中思惟	30	124
会話文	62	66
合計	138	303

ありけむ、障子の懸金のもとに、あきたる穴を教へて、まぎるべき几帳など引きやりたり。(手習)

のように、地の文で、挿入句として使用されている例が多い。会話文中での用例も、

(9) (惟光)「揚名なる人の家になむ侍りける。……くはしきこととは、下人のえ知り侍らぬにやあらむ」と(源氏二)聞こゆ。(夕顔)

(10) (僧都)「こなたはあらはにや侍らむ。(若紫ガ)今日しも端におはしましけるかな。……」と(尼君二)のたまへば、(若紫)のように、積極的な「問い」の表現ではなく、対話相手に対する、言語主体の「疑い」の表明であると考えられる性格のものであり、特に、全62例中26例が、

(11) (朱雀院)「……、今まで思し滞りつるを、なほその方にもよほすにやあらむ、世に久しかるまじき心地なむする」などのたまはせて、(若菜上)

(12) (夕霧)「……、今宵うけたまはる物の音どもの、皆ひとしく耳驚き待れば、なほかくわざともあらぬ御遊びと、かねて思ひ給へたゆみける心の騒ぐにや侍らむ、唱歌などいと仕うまつりにくくなむ。……」とめで聞こえ給ふ。(若菜下)

のように、挿入句的に使用されているものである。

「——ニヤ。」形式の場合も、

(13) (源氏)「もし、かのあはれに忘れざりし人にや」と思しよるも、(夕顔)

(14) (人々)「かくて世は尽きぬるにや」と心細く思ひ惑ふに、

『源氏物語』の要判定疑問表現 ——「ニヤ。」形式を中心に——

(15) (源氏)「(紫の上八)なほいかにおはずべきにか。よかるまじき御心地にや」と思し歎く。(若菜下)

(16) (薫)「……。聖たち給へりしあたりにて、常なきものに思ひ知り給へるにや」と思すに、(総角)

のように、心中思惟において、言語主体の「疑い」の表現として使用されている例が目立ち、また、

(17) まぎるべき几帳なども、暑ければにや、うちかけて、いとよく見入れらる。(空蟬)

(18) 中納言の君、見奉り送らむとにや、妻戸押しあけて居たり。(須磨)

(19) (内府)「……」などのたまひて、酔泣にや、をかしき程に気色ばみ給ふ。(藤裏葉)

(20) 御返り、心細き筋はのちの聞こえも心おくれたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。(御法)

のように、地の文で、挿入句として使用されている場合も多い。会話文中での用例も、全66例中40例までが、

(21) (源氏)「……、頭そり忘む事受けなどして、そのしるしにや、よみがへりたりしを、……」など(頭の中将二)のたまふ。(夕顔)

(22) (源氏)「人がらのをかしかりしも、所がらにや、めづらしう思えきかし」など(紫の上二)語り聞こえ給ふ。(落標)

(23) (大宮)「おほやけごとの繁きにや、私の志の深からぬにや、さしもとぶらひ物し侍らず。……」と、この中将の御事とおぼして

のたまへば、  
(行幸)

のように、挿入句的に使用されており、文末で使用されている場合も、

24 (弘徽殿の女御)「……。かくのたまひさわぐを、はしたなくおもはるるにも、かたへはかがやかしきにや」と、いとほづかしげにて(内大臣ニ)聞こえ給ふ。  
(常夏)

25 (妹尼)「昔聞き侍りしよりも、こよなく思え侍るは、山風をのみ聞きなれにける耳がらにや」とて、「……。」といひながら弾く。  
(手習)

のように、言語主体の、対話相手に対する、自己の「疑い」の「持ちかけ」であると考えられ、積極的な「問い」の表現であるとは考えにくい。

要説明疑問表現における「疑問詞——ニカ。」形式の場合、前掲の用例(2)や、

26 (中将)「忍びたるさまに物し給ふらんは、誰にか」と(妹尼ニ)問ひ給ふ。  
(手習)

27 (中の君)「……。(あなたハ)いかに推し量り給ふにか」と(北の方ニ)のたまふ。  
(東屋)

のように、会話文において、「問い」の表現として使用されている例がかなり存在した。これに対して、要判定疑問表現における、「——ニヤ。」形式の場合、明らかな「問い」の形式と考えられる例は非常に少なく、

28 (源氏)「……。「……。」とまねぶ人なむありし。まことにや」と弁の少将に問ひ給へば、(弁)「ことごとしう、さまでいひなすべ

き事にも侍らざりけり。……。」と聞こゆ。  
(常夏)

29 (宮)「……。この年ごろうけたまはりて、(玉鬘ハあなたの子ニ)なりぬるにや」と聞こえ給へば、(源氏)「さるやう侍る事なり。……。」と、御口かため聞こえ給ふ。  
(行幸)

30 (源氏)「……。まじりものなく、きらきらしかめるなかに、おほきみだつ筋にて、かたくななりとにや」とのたまへば、(玉鬘)「来まさばといふ人も侍りけるを」と聞こえ給ふ。  
(常夏)

の3例程度だが、30の例など、むしろ「問い」の表現というよりも、言語主体の「疑い」の「持ちかけ」に対して、対話相手が反応したものと考えるべきかもしれない。

なお、「——ニヤ——。」形式の、会話文での用例のうち、「ニヤ」以下が対話相手に対する敬語表現を含んでいる例がみられるが、そのうち、

31 (聖)「あなかしこや。一日召し侍りしにやおはしますらむ。……。」と、驚き騒ぎ、うちまみつつ(源氏ヲ)見奉る。  
(若紫)

32 (玉鬘)「……。さばすぐれたるは、まことにや侍らむ」と、ゆかしげに、せちに心入れて思ひ給へば、(源氏)「さかし。……。」とて、  
(常夏)

などは、婉曲的な「問い」の表現としての効果を持っていると考えられよう。

いずれにしても、「——ニヤ。」の形式が、会話文において、明確に「問い」の表現として機能している例は非常に少ない。

ところで、文中用法の「ヤ」を使用する要判定疑問表現のうち、「ヤ」以下が省略されて、実質的には「ヤ」で文が終止している用

例が、「——ニヤ。」形式以外に全186例存在しており、「——ニヤ。」形式と合計すると、文中用法の疑問の係助詞「ヤ」のうち約半数が、実質的には文末に來ていることになる。

表2

連用形	形容詞	30
	形容動詞	2
	助動詞	9
格助詞	べし	3
	まじ	7
	ず	3
接尾辞	を	9
	に	10
係助詞	と	11
	て	4
副助詞	も	71
	のみ	1
	さへ	1
接尾辞	ばかり	1
	ながら	1
副詞	かく	1
	名詞	18
連体形	助動詞	1
	む	1
	べし	2
計	ず	1
	計	186

表2は、「——ニヤ。」形式以外の場合について、「ヤ」の上接語と、それぞれの用例数を示したものである。大部分が、「ある」「あらむ」などの省略された形であると考えられるが、

(33) (源氏八) 寢殿の方に、(人のけはひ聞くやうもや)とおぼして、やをらたちいで給ふ。(末摘花)

(34) (源氏) (新しき年の御さわがれもや)とつつましけれど、この方にとまり給ひぬ。(初音)

のように、「もや」の形が特に多く、

(35) (源氏) (あまりはしたなくや)と思ひかへして、人にしたがへば、(紅葉賀)

(36) たしかならぬ事なれば、(柏木) (ゆゆしくや)とて、ただおほかたの御とぶらひに参り給へるに、(若菜下)

表3は、「——ニヤ。」形式を除いて、実質的には文中用法の「ヤ」

『源氏物語』の要判定疑問表現——「——ニヤ。」形式を中心に

で文が終止している、これらの場合について、その使用場面を示したものであるが、心中思惟での用例が圧倒的多数で、会話文における用例は決して多くないことから、これらの「ヤ」は、実質的には文末に位置していても、「問いかけ」の機能を示しているものとは考えにくい。

### 三 文末用法の「ヤ」の形式

要判定疑問表現のうち、文末用法の「ヤ」を使用する形式は全178例みられる。表4は、これらの場合の使用場面について示したものであるが、会話文中での用例が70%を超えている。前述のように、文中用法の「ヤ」の場合にも、「ヤ」以下が省略されて、実際には「ヤ」で文が終止している例が半数近く存在していたが、その場合、心中思惟で使用されているものが多く、会話文での用例は決して多くなかったことから、文末用法の「ヤ」の場合とは性格が異なっていると考えられる。

表4

地の	文	3
中心	思惟	47
会話	文	128
計		178

表3

地の	文	12
中心	思惟	135
会話	文	39
計		186

表5

名詞	1	
動詞	29	
形容詞	2	
助動詞	る	1
	き	4
	けり	2
	つ	6
	ぬ	2
	たり	6
動詞	り	5
	ず	9
	べし	6
	まじ	1
	む	79
	けむ	3
	らむ	8
まし	8	
計	178	

表5は、要判定疑問表現に関わる、文末用法の「ヤ」について、その上接語と、それぞれの用例数を示したものである。これを見る

と、推量の助動詞「ム」が圧倒的に多く、全体の約45%を占めているが、

(37) (源氏)「……かの浦に静やかに隠ろふべき限待りなむや」と(明石入道二)のたまふ。(明石)

(38) (紀伊守)「……なにがしも、かの女のさうぞく一くだり調じはべるべきを、せさせ給ひてむや。……」と(妹尼二)いふを、

のように、「なむや」「てむや」の形で使用されている例が、それぞれ37例、25例と、特に目立っている。(手習)

そして、文末用法の「ヤ」が、推量の助動詞「ム」「ラム」「ケム」「ジ」「マシ」に下接している用例を合計すると104例となり、全体の半数をはるかに超えていることがわかる。これらの推量の助動詞は、断定の助動詞「ナリ」に上接し得ないもので、したがって、これらの用例は「——ニヤ。」形式になる可能性がもともと存在しないのである。そこで、文末用法の「ヤ」を使用する要判定疑問表現の性格について、「——ニヤ。」形式と純粹に比較するために、これらの推量の助動詞に下接する場合を除いた、残りの74例について考えてみたい。

表6は、その74例について、改めて使用場面を示したものである。

(39) 火ともしたる透影、障子のかみより漏りたるに、やをら寄り給ひて、(源氏) (見ゆや) とおほせと、(帯木)

表6

文	2
思	14
推	58
文	74
地	
中	
心	
会	
計	

(40) (待従) (心細くよるべきも慰むや) とて、知るたより求めて

参りぬ。(蜻蛉)

のように、心中思惟において使用されている例もみられるが、74例中58例までが会話文中で用いられており、

(41) 惟光に、(源氏) 「この西なる家には何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」とのたまへば、(夕顔)

(42) (源氏) 「あはれの事や。よろしく聞こえし人ぞかし。まことによしや」とのたまへば、(紀伊守) 「けしうは侍らざるべし。……」と申す。(帯木)

(43) (右近) 「なほさしのぞけ。我をば見知りたりや」とて、顔をさし出でたり。この女、手を打ちて、(三条) 「あがおもとにこそおはしましたけれ。……」と、いとどろどろしく泣く。(玉鬘)

(44) (源氏) 「いかにぞ。よべ宮は待ち喜び給ひきや」(夕霧) 「しかはかなき事につけても、涙もろに物し給へば、いとふびんにこそ侍れ」と申し給へば、(野分)

(45) (薰) 「すこしもよろしくおぼさるや。昨日ばかりにてだに聞こえさせむ」とあれば、(大君) 「日ごろ経ればにや、今日はいと苦しうなむ。さらばこなたに」と言ひいだし給へり。(総角)

(46) (薰) 「二品の宮に、御文は奉り給ふや」と聞こえ給へば、(女二の宮) 「うちにあし時、うへのさのたまひしかば、聞こえしかど、久しうさもあらず」とのたまふ。(蜻蛉)

のように、「問い」の表現として使用されている。

以上、「——ニヤ。」形式が、会話文中で「問い」の表現として使用されることが非常に少ないのに対し、文末用法の「ヤ」を使用する要判定疑問表現の場合、会話文中で「問い」の表現として主用さ

れていると言える。

ところで、要説明疑問表現の場合は、文中用法では「カ」、文末用法では「ゾ」というように、文中と文末とは使用される助詞が異なっていた。そして、文末用法の「ゾ」を用いる「疑問詞——ゾ」の形式が、身分の低位者から上位者へ対する、直接的な「問い」の表現としては使用しにくいのではないかと、待遇上の問題から代わりに、文中用法の「カ」を文末化したとも言える「疑問詞——ニカ。」の形式が、「疑い」の表現としてだけでなく、婉曲的な「問い」の表現としても多用されるのではないかと考えられた。

これに対して、要判定疑問表現の場合、文末用法においても、文中用法の場合と同様に「ヤ」という助詞が使用される。すなわち、要説明疑問表現の場合のような、助詞の種類の違いによる待遇上の問題は発生しない。そして、文末用法の「ヤ」は、接続のうえからも、いわゆる「詠嘆」の「ヤ」と全く区別できず、本来的には同一のものであると考えられており、また、「ヤ」は「カ」と比較しても柔らかい響きを持っているという説もある<sup>7)</sup>。したがって、文末用法の「ヤ」を使用する要判定疑問表現は、要説明疑問表現における「疑問詞——ゾ」形式のように、強い調子で明確に解答を要求する、詰問的な表現とは異なっており、用例45や46のように、対話相手に対する敬語表現と共起している例がみられることから、優しいニュアンスを持った「問いかけ」であると思われる。このように、文末用法の「ヤ」を使用する形式が、待遇的な問題に関係なく、会話文で「問い」の表現として使用されるため、「——ニヤ。」の形式は、要説明疑問表現における「疑問詞——ニカ。」形式のように、

「問い」の表現として転用される必要がなく、基本的に「疑い」の表現としてのみ使用されているのだと考えられる。

#### 四 文末用法の「カ」の形式

要判定疑問表現のうち、文末用法の「カ」を使用する形式は全74例みられる。

なお、文末用法の「カ」のなかには、

47いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきか  
のけしきにて臥し給へるさま、いたらうたげに苦しげなり。

(葵)

48今日か明日かの心地するを、対面の心になはぬ事など、こまやかに書かせ給へり。

(横笛)

49御馬ども近う立てて、見やりなる倉か何ぞなる、稲ども取り出でて飼ふなど、めづらしう見給ふ。

(須磨)

のように、並立的に使用された、慣用表現的な用例もみられるが、それらの例は除外している。

表7は、文末用法の「カ」を用いる要判定疑問表現について、その使用場面を示したものである。

文末用法の「ヤ」を使用する形式の要判定疑問表現と比べると、

50さすがに心細ければ、(空蟬)〈おぼし忘れぬる

か〉と、試みに、「……」と聞こえたり。

(夕顔)

51(玉鬘)〈紙燭をさしいでたるか〉とあきれたり。

(虫)

52(女三の宮)〈物におそはるるか〉と、せめて見あげ給へれば、

あらぬ人なりけり。

(若菜下)

53) さぶらふ人々のなかに、(か)の中納言の手に似たる手して書きたるか」とまで思し寄れど、

(若菜下)

54) (中君)「……」とのたまふを、(薫)《夢語りか》とまで聞く。

(宿木)

55) (浮舟)《つひに、かくて生き返りぬるか》と思ふも、くちをしければ、

(手習)

のように、心中思惟で使用されている例がはるかに多いが、これらの場合、言語主体の強い疑惑を含む、感情表現的色彩の認められる例が少なくない。そういう意味で、この形式は、要説明疑問表現における「疑問詞——ゾ」形式が、心中思惟で使用されている場合と、ある意味で対応する性格を持っているように思われる。

このように、文末用法の「カ」を使用する形式の要判定疑問表現が、文末用法の「ヤ」を使用する形式と比較して、心中思惟における用例が目立つという事実は、文末用法の「ヤ」は「問い」を表し、文末用法の「カ」は「疑い」を表すという、「あゆひ抄」以来の指摘を裏付けていると言えよう。

しかし、文末用法の「カ」を使用する要判定疑問表現のうち、過半数は会話文で用いられている。そして、その場合、大部分が、

(帚木)

57) (源氏)「……。それは、とどめ給ふ形見もなきか」と、をさな

かりつるゆくへの、なほたしかに知らまほしくて、問ひ給へば、

(僧都)「亡くなり侍りし程にこそ侍りしか。……。」と聞こえ給ふ。

(若紫)

58) (源氏)「心やすきひとり寝の床にて、ゆるびにけり。うちよりか」とのたまへば、(頭中将)「しか。まかで侍るままなり。……。」と、

いそがしげなれば、

(末摘花)

59) (源氏)「まことにその人か。よからぬ狐などいふなる物のたはぶれたるか。亡き人のおもてぶせなる事いひ出づもあなるを、たしかなる名のりせよ。……。」と(物怪二)のたまへば、

(若菜下)

60) 大宮、「大将の、そなたに参りつるか」と問ひ給ふ。御供に参りたる大納言の君、「小宰相の君に物のたまはむとにこそははべるめりつれ」と聞こゆれば、

(蜻蛉)

61) (僧都)「鬼か、神か、狐か、木精か。かばかりの天の下の験者のおはしますには、え隠れ奉らじ。名のり給へ、名のり給へ」と、衣を取りて引けば、

(手習)

のように、身分の上位者から下位者へ対して、明確に解答を要求しようとする「問い」の表現として使用されており、文末用法の「ヤ」を使用する形式よりも強い調子の表現であると考えられる。そういう意味で、この形式は、会話文で使用されている場合にも、要説明疑問表現における「疑問詞——ゾ」形式と共通する性格を持っているように思われる。

## 五 おわりに

要説明疑問表現の場合、文末用法の「ゾ」を用いる、

疑問詞——ゾ。

の形式は、身分の下位者から上位者へ対する、直接的な「問い」の表現としては使用しにくいのではないかと、待遇上の配慮から、代わりに、文中用法の「カ」を文末化したとも言える、

疑問詞——ニカ。

の形式が、「疑い」の表現としてだけでなく、「問い」の表現としても使用されているのではないかと考えられた。

これに対して、要判定疑問表現の場合、文中用法の場合と同様に、文末用法においても「ヤ」を使用する、

——ヤ。

の形式が存在し、「問い」の表現として使用されるため、要説明疑問表現における「疑問詞——ニカ。」形式に対応する、

——ニヤ。

の形式は、ほとんど「疑い」の表現としてのみ使用されると考えられる。そして、文末用法の「カ」を用いる、

——カ。

の形式が、要説明疑問表現における、「疑問詞——ゾ。」と対応する性格を持っているように思われる。

注

(1) 拙稿「中古和文の要説明疑問表現——『源氏物語』を資料

として——」(『日本文学研究』第26号(一九九〇年))

(2) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(一九六

三年 東大出版会) 七五四ページ。

(3) 拙稿「『平家物語』の要説明疑問表現」(『辻村敏樹教授古

『源氏物語』の要判定疑問表現——「——ニヤ。」形式を中心に—

稀記念 日本語史の諸問題(一九九二年 明治書院)所収)

(4) 会話文中に心中思惟の部分が引用されている場合は、心中思惟における用例と考える。

(5) 北原保雄『日本語助動詞の研究』(一九八一年 大修館書店) 五二—ページ以下。

(6) 佐伯梅友『万葉集の助詞二種』(『万葉語研究』(一九六三年 有朋堂 再版) 所収)

(7) 『古典語現代語助動詞助動詞詳説』(一九六九年 学燈社) 五七九ページ。

(8) 『あゆみ抄』では、「カ」を「問ふカ」、「ヤ」を「思ふカ」のように区別している。なお、『万葉集』の場合、原則として、文末の「ヤ」は「問い」を表し、「カ」は「疑い」を表すことが、注(6)の佐伯論文で指摘されている。